

戦前広島における建築家活動の実態について

—地方都市における建築家活動の形態とその特徴に関する研究—

THE STUDY ON THE ACTIVITIES AND THEIR FEATURES OF ARCHITECTS IN HIROSHIMA BEFORE WORLD WAR TWO

—The study on the architects activity form and feature in local city—

李 明*, 石丸 紀興**

Li MING and Norioki ISHIMARU

This paper aims to explore the state of activities of architects in modern Hiroshima. Based on the sufficient understanding to modern architectures, their designers and designing organizations of pre-war Hiroshima, this study tends to clarify the features of the activities of those architects who were in Hiroshima during Taisho period and the earlier stage of Showa period. The results of this study are: Before being bombarded, the mainstream of architects' activities in Hiroshima was of those non-local architects, particularly, (1) activities of architects by utilizing Trust System in earlier stage of Showa; (2) building institutions of Guan Gong Sheng Ting and the activities of architects; (3) moreover, a series of bank buildings, with the involvement of famous architects, such as Kingo Tatsuno and Uheiji Nagano, and by their respective single piece of work, contribute a lot in the history of architecture of modern Hiroshima. In addition, up to now, little has been known about the activities of folk architects or non-government building institutions. And the pieces of work from local building institutions are few as well.

Keywords: Local city, Hiroshima, Modern Architecture, Architect, Activity form, Design style

地方都市、広島、近代建築、建築家、活動形態、デザイン様式

1. はじめに

本稿では、広島の近代建築を建築家の活動と関連させて考察することにより、戦前地方都市における建築家活動の形態とその特徴について明らかにしようとするものである。

都市を形成する建築物は、建設される場との係わりが強いと言われている。従って環境財として優れた都市を建設し、建築を残すためには、地域的条件が考慮される必要がある。ここで、まず地方を対象に歴史的展開の中で、公共機関、民間による建設活動、あるいは建築家活動の特徴などの実態を明らかにすることが重要といえよう。また、地方における建築家の活動は、これまでの日本の近代建築史研究の中であまり重視されてこなかった。しかし、実際には多くの建築家の活動があり、そのような活動を含めた研究を進めなければ日本の近代建築史は曖昧なままで終始するだろう。本研究はこのような状況に対応する研究の一助としても重要である。

広島は中国地方の中核都市として明治末期から多くのレンガ造、コンクリート造の建物が建てられるようになった。その設計には、日本を代表する建築家辰野金吾や長野宇平治なども関わり、多くの有力な建築家が広島で活動を見せたのである。戦前の広島の建築は被爆によって大部分が廃墟になり、建物に関する資料はほとんど散逸し、また存続している建築は少ない。さらに、存続している被爆建物は周囲の建物と共にそれなりの都市環境を創り出しているが、現地では市街地再開発に当ってそれらに対する正確な情報を求めて

いる。ここで、広島の近代建築をその設計者と関連させて考察することは、広島の近代建築を把握する上で重要であるだけでなく、地方における建築家活動を論じる上でも重要な意味を持つだろう。

広島の近代建築については、合衆国戦略爆撃調査団の報告書¹や被爆建造物調査研究会による調査記録²があり、また佐藤重夫らによる原爆ドーム（広島県産業奨励館）に関する研究³や筆者による一連の研究⁴がある。本稿ではこれらを適宜参考にしつつ、さらに諸文献と調査を通じて⁵広島における建築家活動の実態について論じたい。

2. 戦前広島の近代建築の建設過程

戦前、広島には建物としてどのようなものが存在していたのか、それを解明するのは容易ではない。その際、被爆時存在した建物については、合衆国戦略爆撃調査団の報告書「広島に対する原子爆弾の効果」に載っている被爆建物リストによってほぼ把握できる。報告書によれば、調査対象になったのは、135件の建物⁶であった。しかしこれらの調査団の被爆建物リストにはいくつかの建物名の間違いが見られ⁷、また、この135件の中に含まれていない建物がさらに存在するというのである⁸。現存する建物は確認補充することができるが、被爆前に取り壊された建物や被爆時に消滅したり、その後に取り壊されたりした建物すべてを、現段階で把握することは困難である。ここで、本稿では合衆国戦略爆撃調査団の調査対象になった135件の建物を主な考察対象にし、諸文献調査を通じて若干の確

* 広島国際大学建築創造学科 講師・博士(工学)

** 広島国際大学建築創造学科 教授・工博

Lecturer, Department of Integrated Architecture, Hiroshima International University, Dr. Eng.
Prof., Department of Integrated Architecture, Hiroshima International University, Dr. Eng.

認と補足を試みながら、広島近代建築について考察する。

2-1. 軍用建築

広島市において、従来にない大規模な非木造建物が建設されるようになるのは、明治以降の軍都化の過程、いいかえるなら軍に関連した施設の整備過程においてである。軍事施設、軍用建物は、基町などの都市中心部から牛田、宇品、出汐、霞（現在の地名）といった都市周辺部に及んでおり、各地区において大規模な建物が建てられた。明治4年の軍制改革によって鎮西鎮台の第1分営が広島城を本拠に設置された⁹。明治6年1月には広島鎮台に昇格、さらに明治11年には第5師団と改称され、いくつかの連隊が配置された。それに伴い、明治10年代末から30年代初にかけて基町地区にレンガ造による倉庫等も建設されたと考えられる。日清戦争の際、広島は臨時首都の様相を呈し、基町の西練兵場内に設けられた仮議事堂では、第7回臨時帝国議会（明治27年10月15日）が開催された。その議事堂は木造であるが当時内務省3等技師妻木頼黄による設計であった¹⁰。明治27年の日清戦争は、10年後の日露戦争とともに広島市に軍事施設の集積を強いることとなったと言えるだろう。

軍事施設そのものではないが、牛田水源池は広島軍用水道として陸軍の直轄工事で施工された。日清戦争終結直後の明治28年11月に公布された臨時広島軍用水道布設部官制¹¹により陸軍の直轄工事として計画、明治29年5月から工事が始められ、2年後の明治31年8月に完成した¹²。その風景は明治31年8月25日通水式の写真から確認できる¹³。その後数期にわたって拡張・整備が施されていった。大正13年の3月に取水ポンプ室がレンガ造で、5月に送水ポンプ室が鉄筋コンクリート造レンガ張り、また緩速濾過池の上屋として楕円形のドームを載せた7基の附属建物がレンガ造で整備された。これらは軍事施設というよりむしろ都市施設に属するが、いずれにせよ水道事業がレンガの製造とレンガ造の建設を著しく促進させたといえよう。当初基町にあった広島陸軍兵器支廠を東新開（霞）に移転させるため、明治37年1月からレンガ造2階建てと木造によって兵器の格納倉庫群や修理工場群が建ちはじめ、大正期にいたるまで続々と姿を現し、大正7年には一大兵站基地が形成された（昭和15年に兵器補給廠と改称）。明治44年3月には宇品陸軍糧秣支廠の缶詰工場が宇品御幸通りに鉄骨造と連続一体化した巨大なレンガ造で建設された。また明治38年9月に撮影¹⁴された出汐の陸軍被服廠広島派出所の建設は、大規模な木造建築であるが、更にそれに続いて建てられ大正2年8月に完成した4棟の倉庫は、鉄筋コンクリート造にレンガ積みを混用した巨大な建物であったことは特筆される。このように明治中期から大正初期にかけて多くの巨大なレンガ造軍事施設が広島に出現した。広島の藩政時代からの脱皮を告げる建物はまず、軍事建築の大規模建築、特にレンガ造建築からはじまったと言ってもよいであろう。軍用建築は生産・保管・管理などの産業的な機能とともに、とりわけ強固で耐久・耐火的な性能が要求される場合があり、そのような建物は従来の日本建築では充足されず、イギリスの影響もあってレンガ造が普及していったのである¹⁵。

以上のように、軍都として多数の陸軍の関連施設が都心、郊外に建設された。これらの軍関係建築の設計には多くの建築家・設計組織の活動が推測されるが、これまで確認できるのは陸軍経理部（昭和15年竣工の広島陸軍幼年学校を設計）のみである¹⁶。諸文献資料¹⁷により確認できる軍関係建物をまとめると表1のようになる。

表1 軍関係の建物

| 建物名称 | 竣工年 | 設計者/施工者 | 構造 |
|--------------------|-------|----------|----------|
| 広島仮議事堂 | 明治27年 | 妻木頼黄 | 木造 |
| 牛田水源池ポンプ室・汽関室 | 明治31年 | 不詳 | レンガ造 |
| 宇品陸軍糧秣支廠倉庫 | 明治43年 | 不詳 | レンガ造 |
| 宇品陸軍糧秣支廠 | 明治44年 | 不詳/大林組 | レンガ・鉄骨造 |
| 広島陸軍被服支廠 | 大正2年 | 不詳 | RC・レンガ張り |
| 広島陸軍兵器補給廠 | 大正9年 | 不詳/大岩組 | レンガ造 |
| 牛田水源池濾過池調整機上屋 | 大正13年 | 不詳 | レンガ造 |
| 牛田水源池送水ポンプ室 | 大正13年 | 不詳 | RC造 |
| 牛田水源池量水室 | 昭和10年 | 不詳 | RC造 |
| 宇品凱旋館 | 昭和14年 | 不詳/清水組 | RC造 |
| 広島陸軍幼年学校 | 昭和15年 | 陸軍経理部/不詳 | RC造 |
| 中国軍管区関連施設・供給品臨時集積所 | 不詳 | 不詳 | レンガ造 |
| 中国軍管区関連施設・物資臨時集積所 | 不詳 | 不詳 | レンガ造 |
| 中国軍管区関連施設・兵器部倉庫 | 不詳 | 不詳 | レンガ造 |
| 中国軍管区関連施設・弾薬庫 | 不詳 | 不詳 | RC造 |

注：表1は、注17) に示している参考文献を参照に筆者が作成した。

2-2. 金融関係・文教建築

広島における近代建築は、軍用建物がレンガ造で建てられたのに引き続き、金融建物や産業建物においてレンガ造が建設され、さらに大正期になると民間・公共建物において鉄筋コンクリート造が続々と建てられる。ここでは金融関係建築と文教建築について述べる。

ここで、諸文献資料¹⁸⁾により確認できる、金融関係建築をまとめると表2に、文教関連建築をまとめると表3になる。

表2のように、レンガ造としては、まず明治32年に住友銀行広島支店が建設されていたことが注目される。次いで第六十六銀行京橋出張所（明治33年）、広島県農工銀行（明治39年）、広島商業銀行本店（大正2年）、不動貯金銀行広島支店（大正5年）、西村好時の設計による農林中央銀行広島支店（大正9年）、住友合資会社工作部の設計による住友銀行広島支店東出張所（大正10年）、などが続く。なお、鉄筋コンクリート造の金融関係建物は、大正10年の安田生命広島支店、続いて渡辺節の設計による鴻池銀行（大正12年）、長野宇平治の設計による三井銀行広島支店（大正14年）、建築興業の設計による日本証券取引所広島支所（昭和1年）と芸備銀行（昭和2年）、宗兵蔵の設計による千代田生命（昭和3年）、竹腰健造の設計による住友銀行（昭和3年）、桜井小太郎の設計による明治生命（昭和4年）、増田清の設計による広島県農工銀行本店（昭和6年）といったところが続く。表3のように、文教建築は、岡田信一郎の設計による浅野図書館（大正15年）、文部省官繕課の設計による広島高等学校講堂（昭和2年）、増田清の設計の本川国民学校（昭和3年）、文部大臣官房建築課の設計による広島文理科大学本館（昭和6年）、広島県官繕課の設計による県立広島商業学校（昭和9年）など建てられた。

以上のように、昭和10年頃まで多くの鉄筋コンクリート造による建物が広島に建設された。このような非木造化、とりわけ鉄筋コンクリート化を促進する動きは、関東大震災を背景にしながら、その他の理由も作用した。大正14年4月10日付中国新聞に「公共建物は成るべく鉄筋コンクリートで構造の強固期せ、郡市長警察署長への通牒」という見出しの記事に表れているように、公共建築の鉄筋コンクリート構造化への誘導が、政策的に展開されたのである。ここでは木造建物の構造的欠陥に触れ「成るべく鉄筋コンクリート造りとする」よう促したのである。また木造の白蟻被害が挙げられる。特に昭和初期に小学校での被害が多く報告されている。昭和4年6月15日付中国新聞に「小中学校を白蟻が一斉に襲う、広島市内の旧校舎全部、県下各地にも被害甚大」という見出しで小学校の白蟻被害について報じ、続いて同月16日中国新聞でも白蟻被害から鉄筋コンクリート化への方向について報じている。

表2 金融関係建物

| 建物名称 | 竣工年 | 設計者/施工者 | 構造 |
|--------------|-------|--------------------|------|
| 住友銀行広島支店(旧) | 明治22年 | 不詳/大林組 | レンガ造 |
| 第六十六銀行京橋出張所 | 明治33年 | 不詳 | レンガ造 |
| 日本銀行広島出張所 | 明治38年 | 辰野金吾/不詳 | 木造 |
| 広島県農工銀行 | 明治39年 | 不詳 | レンガ造 |
| 広島商業銀行本店 | 大正2年 | 不詳 | レンガ造 |
| 不動貯金銀行広島支店 | 大正5年 | 不詳/藤田組 | レンガ造 |
| 農林中央金庫広島支所 | 大正9年 | 清水組設計部・西村好時/清水組 | レンガ造 |
| 住友銀行広島支店東出張所 | 大正10年 | 住友合資会社工作部/大林組 | レンガ造 |
| 安田生命広島支店 | 大正10年 | 不詳/清水組 | RC造 |
| 鴻池銀行広島支店 | 大正11年 | 渡辺 節/不詳 | RC造 |
| 安田銀行広島支店 | 大正11年 | 不詳 | レンガ造 |
| 三井銀行広島支店 | 大正14年 | 長野宇平治/大倉土木 | RC造 |
| 逓信銀行本店 | 昭和2年 | 建築興業/大林組 | RC造 |
| 千代田生命広島支店 | 昭和3年 | 赤兵 蔵/大倉土木 | RC造 |
| 住友銀行広島支店(新) | 昭和3年 | 住友合資会社工作部/竹腰健造/大林組 | RC造 |
| 明治生命広島支店 | 昭和4年 | 桜井小太郎/清水組 | RC造 |
| 野村証券広島出張所 | 昭和4年 | 不詳 | RC造 |
| 三和銀行広島支店 | 昭和4年 | 不詳 | RC造 |
| 広島県農工銀行本店 | 昭和6年 | 増田清/竹中工務店 | RC造 |
| 広島信用組合本部 | 昭和6年 | 大崎建築工務所/不詳 | RC造 |
| 広島銀行集合所 | 昭和10年 | 竹中工務店/同左 | RC造 |
| 日本銀行広島支店 | 昭和11年 | 長野宇平治/清水組 | RC造 |
| 広島貯金支局 | 昭和12年 | 逓信省・山田守/藤田組 | RC造 |
| 三井物産広島出張所 | 昭和12年 | 不詳/清水組 | RC造 |
| 三井信用組合本部 | 昭和13年 | 清水組/清水組 | RC造 |

注:表2は、注18) に示している参考文献を参照に筆者が作成した。

表3 文教建築のリスト

| 建物名称 | 竣工年 | 設計者/施工者 | 構造 |
|-----------------|-------|------------------|------|
| 天満国民学校講堂 | 大正13年 | 不詳 | S造 |
| 光道国民学校 | 大正13年 | 不詳/藤田組 | RC造 |
| 広島文理科大学永徳閣(尚志会) | 大正14年 | 広島県立職業学校/同左 | レンガ造 |
| 市立浅野図書館 | 大正15年 | 岡田信一郎/竹中工務店 | RC造 |
| 崇徳中学校武道場 | 大正15年 | 不詳 | S造 |
| 広島高等学校講堂 | 昭和2年 | 文部省営繕課/不詳 | RC造 |
| 荒神町国民学校講堂 | 昭和2年 | 不詳 | S造 |
| 本国民学校校舎 | 昭和3年 | 増田清/清水組 | RC造 |
| 広島流川教会 | 昭和2年 | W・ヴォーリス・内藤多仲/藤田組 | RC造 |
| 広島工業専門学校発祥実験室 | 昭和4年 | 不詳 | RC造 |
| 千代田国民学校講堂 | 昭和4年 | 不詳 | S造 |
| 竹屋国民学校講堂 | 昭和4年 | 不詳 | S造 |
| 広島文理科大学本館 | 昭和6年 | 文部省大臣官房建築課/大倉土木 | RC造 |
| 三徳国民学校講堂 | 昭和7年 | 不詳/清水組 | S造 |
| 第一国民学校 | 昭和7年 | 不詳/清水組 | RC造 |
| 県立広島第二中学校講堂 | 昭和7年 | 不詳/内外建築工務店 | RC造 |
| 本川国民学校講堂 | 昭和8年 | 不詳 | S造 |
| 県立広島第二中学校プール | 昭和8年 | 不詳/生徒/教職員ら | RC造 |
| 県立広島商業学校 | 昭和9年 | 広島県営繕課/川本組 | RC造 |
| 袋町国民学校 | 昭和12年 | 広島市役所営繕課/森田工業 | RC造 |
| 舟入国民学校講堂 | 昭和12年 | 不詳 | S造 |
| 広島女子高等師範学校体育館 | 昭和12年 | 不詳 | RC造 |
| 広島高等師範学校附属国民学校 | 昭和13年 | 不詳 | RC造 |
| 崇徳中学校講堂 | 昭和13年 | 不詳 | RC造 |
| 官立広島市販学校講堂・職員室 | 昭和16年 | 広島県営繕課/森信組 | RC造 |
| 広島市立中学校講堂 | 昭和18年 | 不詳 | S造 |
| 山陽中学校講堂 | 不詳 | 不詳 | S造 |

注:表3は、注18) に示している参考文献を参照に筆者が作成した。

2-3. 産業建築

軍都化も産業的な性格をもつとは既に指摘したが、近代産業施設そのものに触れてみよう。広島が細々とした地場産業から近代産業都市へと蓄積をはじめるのは、まず紡績関係¹⁹⁾であり、大阪合同紡績(中国紡績を吸収)、日本麻紡績、帝人広島工場、金華人絹広島工場等の企業が進出あるいは事業拡大する。そして産業的な発展をするためにも電力やガスといったエネルギー供給、電車やバスなどの交通機関が必要となってくる。さらに缶詰業、金属工業、化学工業、造船業といった産業が次第に発達していく²⁰⁾。多くの場合、そういった過程を非木造建物が支えていたのである。

ここで、諸文献資料²¹⁾により確認できる産業建築とその他関連建築をまとめると表4のようになる。表4のように、レンガ造で建設された主な近代産業施設を、年を追って列挙すると、広島電燈火力発電所(明治27年)、中国紡績(明治29年)、広島瓦斯広島工場(明治39年)、広島電気軌道火力発電所(大正元年)、日本麻紡績(大正8

年)、帝国人造絹広島工場(大正10年)などが挙げられる²²⁾。なお明治41年に竣工した広島電燈亀山水力発電所は、水力発電を効率よく行うために先駆的にレンガ造が導入された²³⁾ように、産業の近代化がレンガ建築を必要としたのである。レンガ造に次いで、鉄筋コンクリート造や鉄骨構造に展開していった。チェコ人ヤン・レツルが設計した広島県物産陳列館(大正4年)、建築興業の設計による中国新聞社本館(昭和元年)、今井謙次・内藤多仲の設計による広島中央放送局原放送所(昭和3年)、十代田三郎・内藤多仲の設計による広島中央放送局(昭和3年)、増田清の設計による広島市役所(昭和3年)や燃料会館(昭和4年)、井戸田建築事務所設計による麒麟麦酒広島工場(昭和13年)などが鉄筋コンクリート造あるいは鉄骨造との混合構造で建設された。また逓信省の建築として、上浪朗の設計による広島西電話分室(昭和3年)と広島通信局(昭和8年)や山田守の設計による電気試験所広島出張所と広島中央電話局西分局(昭和12年)などが建設される。なお、昭和4年に広島初の百貨店として福屋百貨店が建設され、昭和13年には8階建ての新館が誕生する²⁴⁾。設計は片岡石本建築事務所と渡辺仁工務店がそれぞれ担当したのである。昭和9年には金華人絹広島工場(横川工務所の設計)、昭和11年には広島富国館²⁵⁾(松尾光博建築事務所の設計)、昭和14年には佐藤功一の設計による赤十字社広島病院が建てられる。

表4 産業・行政・商業及びその他建築のリスト

| 建物名称 | 竣工年 | 設計者/施工者 | 構造 |
|-------------|-------|-----------------|------|
| 広島電燈火力発電所 | 明治27年 | 不詳 | レンガ |
| 中国紡績 | 明治29年 | 不詳 | レンガ |
| 広島瓦斯広島工場 | 明治39年 | 不詳 | レンガ |
| 広島電気軌道火力発電所 | 大正元年 | 不詳 | レンガ |
| 広島電燈亀山発電所 | 大正元年 | 不詳 | レンガ |
| 広島県産業奨励館 | 大正4年 | ヤン・レツル/藤田組 | RC造 |
| 日本麻紡績 | 大正8年 | 不詳 | レンガ |
| 中国製紙 | 大正9年 | 不詳 | RC造 |
| 広島地方専売局 | 大正10年 | 不詳 | RC造 |
| 帝国人造絹広島工場 | 大正10年 | 不詳 | レンガ造 |
| 広島駅 | 大正11年 | 逓信省 | RC造 |
| 日本十字社広島支部 | 大正14年 | 不詳 | RC造 |
| 中国新聞社本館 | 昭和1年 | 建築興業・大森喜一/森田組 | RC造 |
| 広島中央電話局 | 昭和3年 | 逓信省・上浪朗/清水組 | RC造 |
| 広島中央放送局原放送所 | 昭和3年 | 今井謙次・内藤多仲/不詳 | RC造 |
| 広島中央放送局 | 昭和3年 | 十代田三郎・内藤多仲/安藤組 | RC造 |
| 広島市役所 | 昭和3年 | 増田清/鴻池組 | RC造 |
| 燃料会館 | 昭和4年 | 増田清/清水組 | RC造 |
| 福屋百貨店 | 昭和4年 | 片岡石本建築事務所/竹中工務店 | RC造 |
| 広島通信局 | 昭和8年 | 逓信省・上浪朗/藤田組 | RC造 |
| 広島地方気象台 | 昭和9年 | 広島県営繕課/不詳 | RC造 |
| 山陽文徳殿 | 昭和9年 | 広島市営繕課/不詳 | RC造 |
| 金華人絹広島工場 | 昭和9年 | 横川工務所/藤田組 | RC造 |
| 広島通信診療所 | 昭和10年 | 逓信省・山田守/坂本組 | RC造 |
| 山陽記念館 | 昭和10年 | 佐藤功一/藤田組 | RC造 |
| 広島富国館 | 昭和11年 | 松尾光博建築事務所/清水組 | RC造 |
| 電気試験所広島出張所 | 昭和12年 | 逓信省・山田守/不詳 | RC造 |
| 広島中央電話局西分局 | 昭和12年 | 逓信省・山田守/藤田組 | RC造 |
| 福屋百貨店 | 昭和13年 | 渡辺仁/藤田組 | SRC造 |
| 麒麟麦酒広島工場 | 昭和13年 | 井戸田建築事務所/大倉土木 | RC造 |
| キリンビヤホール | 昭和13年 | 井戸田建築事務所/清水組 | RC造 |
| 広島赤十字病院 | 昭和14年 | 佐藤功一/藤田組 | RC造 |

注:表4は、注21) に示している参考文献を参照に筆者が作成した。

3. 建築家活動の類型

以上のように、広島における非木造建物は、軍用建築がレンガ造で建てられたのに引き続き、民間商業建物や産業建物においてレンガ造が建設され、さらに大正期になると民間・公共・学校建築において鉄筋コンクリート造が続々と建てられる。こうして広島は近代都市としての歩みを始め、大正、昭和初期ともなると広島市の都心にもレンガ造、コンクリート造の大型の建物が多数建てられるようになる。これらは被爆に際しても倒壊しなかったものがあり、その建

築的な特徴と建築家について確認することができる。前章で、その設計者が確認できた建物（幾つかの木造建築を含める）を年代順にまとめると表5のようになる。

表5 戦前広島での活動が確認できる建築家と作品

| 竣工年 | 建物名称 | 建築家・設計組織 | 所属 | 構造 |
|-------|--------------------|----------------|----|-------|
| 明治27年 | 帝国議会仮議事堂 | 妻木頼黄 | ○ | 木造 |
| 明治31年 | 広島市水道局牛田浄水場濾過池付属建物 | W.K.バートン | ○ | レンガ造 |
| 明治38年 | 日本銀行広島出張所 | 辰野金吾 | ○ | 木造 |
| 明治40年 | 三十四銀行広島支店 | 辰野金吾 | ○ | 木造 |
| 大正4年 | 広島県物産陳列館 | ヤン・レツル | ○ | レンガ造 |
| 大正4年 | 広島文理科大学永備閣 | 広島県立職工学校 | ● | レンガ造 |
| 大正9年 | 農林中央金庫広島支所 | 清水組設計部・西村好時 | ○ | レンガ造 |
| 大正10年 | 住友銀行東松原支店 | 住友合資会社工務部 | ○ | レンガ造 |
| 大正11年 | 広島駅 | 鉄道省経理局 | ○ | RC造 |
| 大正12年 | 浦池銀行広島支店 | 渡辺節 | ○ | RC造 |
| 大正14年 | 三井銀行広島支店 | 長野宇平治 | ○ | RC造 |
| 昭和1年 | 日本証券取引所広島支所 | 建築興業 | ○ | S-RC造 |
| 昭和1年 | 中国詩文社本館 | 建築興業・大森喜一 | ○ | RC造 |
| 昭和1年 | 市立浅野図書館 | 岡田信一郎 | ○ | RC造 |
| 昭和2年 | 広島高等学校講堂 | 文部省営繕課 | ○ | RC造 |
| 昭和2年 | 芸備銀行本店 | 建築興業 | ○ | RC造 |
| 昭和2年 | 広島流川教会 | W・ヴォーリス・内藤多仲 | ○ | RC造 |
| 昭和3年 | 広島中央放送局原放送所 | 今井兼次・内藤多仲 | ○ | RC造 |
| 昭和3年 | 広島中央電話局 | 逓信省・上浪朗 | ○ | RC造 |
| 昭和3年 | 広島市役所 | 増田清 | ○ | RC造 |
| 昭和3年 | 広島中央放送局 | 十代田三郎・内藤多仲 | ○ | RC造 |
| 昭和3年 | 本川国民学校校舎 | 増田清 | ○ | RC造 |
| 昭和3年 | 千代田生命広島支社 | 宗兵衛 | ○ | RC造 |
| 昭和3年 | 住友銀行広島支店 | 住友合資会社工務部・竹腰健造 | ○ | RC造 |
| 昭和4年 | 燃料会館 | 増田清 | ○ | RC造 |
| 昭和4年 | 明治生命広島支店 | 桜井小太郎 | ○ | RC造 |
| 昭和4年 | 福屋旧館 | 片岡石本建築事務所 | ○ | RC造 |
| 昭和4年 | 中国配電本店 | 橋本建築事務所 | ○ | RC造 |
| 昭和6年 | 日本勧業銀行広島支店 | 増田清 | ○ | RC造 |
| 昭和6年 | 広島文理科大学本館 | 文部省大臣官房建築課・西村勝 | ○ | RC造 |
| 昭和6年 | 広島信用組合狭瀬橋支所 | 大崎建築工務所 | ○ | RC造 |
| 昭和8年 | 広島逓信局 | 逓信省・上浪朗 | ○ | RC造 |
| 昭和9年 | 山陽文徳館 | 広島市役所営繕課 | ● | RC造 |
| 昭和9年 | 金華人納広島工場 | 横川工務所 | ○ | RC造 |
| 昭和9年 | 県立広島商業学校 | 広島県営繕課 | ● | RC造 |
| 昭和9年 | 広島地方気象台 | 広島県営繕課 | ● | RC造 |
| 昭和10年 | 広島銀行集会所 | 竹中工務店 | ○ | RC造 |
| 昭和10年 | 広島逓信診療所 | 逓信省・山田守 | ○ | RC造 |
| 昭和10年 | 山陽記念館 | 佐藤功一 | ○ | RC造 |
| 昭和11年 | 広島県商工経済会 | 今井兼次・小田能清 | ○ | RC造 |
| 昭和11年 | 広島富国館 | 松尾光博建築事務所 | ○ | RC造 |
| 昭和11年 | 日本銀行広島支店 | 長野宇平治 | ○ | RC造 |
| 昭和12年 | 袋町国民学校 | 広島市役所営繕課 | ● | RC造 |
| 昭和12年 | 電気試験所広島出張所 | 逓信省・山田守 | ○ | RC造 |
| 昭和12年 | 広島貯金支局 | 逓信省・山田守 | ○ | RC造 |
| 昭和12年 | 広島中央電話局西分局 | 逓信省・山田守 | ○ | RC造 |
| 昭和13年 | 福屋百貨店 | 渡辺仁 | ○ | RC造 |
| 昭和13年 | 麒麟麦酒広島工場 | 井戸田建築事務所 | ○ | RC造 |
| 昭和13年 | キリンビヤホール | 井戸田建築事務所 | ○ | RC造 |
| 昭和13年 | 広島市信用組合本店 | 清水組 | ○ | RC造 |
| 昭和14年 | 赤十字社広島病院 | 佐藤功一 | ○ | RC造 |
| 昭和15年 | 広島陸軍幼年学校炊事室 | 陸軍経理部 | ○ | RC造 |
| 昭和16年 | 官立広島師範学校講堂 | 広島県営繕課 | ● | RC造 |

注：記号○は外来建築家・設計組織を示し、●は地元建築家・設計組織を示す。

表5をみると、設計者が確認できる建物は53棟である。その中、広島の営繕組織の設計が6棟であり、残り47棟は広島に拠点を置かない外来建築家・設計組織により設計されたことが指摘できる。まず、戦前の広島において活動した外来建築家及び設計組織をその活動の拠点によって首都圏の建築家、関西及び所在不詳の建築家、国の営繕組織の建築家、外国人建築家として4つに区分してまとめると図1のようになる。このように、外来建築家の活動として、①東京からは辰野金吾、長野宇平治、西村好時、大森喜一、岡田信一郎、今井兼次、内藤多仲、桜井小太郎²⁰⁾、佐藤功一、渡辺仁、建築興業、横川工務所、清水組、井戸田建築事務所などの建築家又は設計組織の活動、②関西からは渡辺節、増田清、宗兵衛、竹腰健造、片岡石本建築事務所、住友合資会社工務部（現日建設）、竹中工務店という建築家又は設計組織の活動、③国の営繕組織からは、宮内省の建

築家妻木頼黄、逓信省の建築家山田守、上浪朗、十代田三郎²¹⁾、文部省大臣官房建築課の西村勝、なお鉄道省経理局、文部省営繕課、陸軍経理部などの活動、④外国人建築家の活動としてW.K.バートン、チェコ人建築家ヤン・レツル、W.ヴォーリスの活動、⑤その他、橋本建築事務所、大崎建築工務所、松尾光博建築事務所の活動、などがあつたことが分かる。

なお、表5と図1を見ると民間建築家の作品として増田清、佐藤功一の作品がいくつか見られて比較的目立つものの、その以外の建築家の作品は殆ど単発的な作品になっていることが分かる。そして、国の営繕組織の建築家の活動として山田守の作品が比較的にかつたことが注目されるのである。

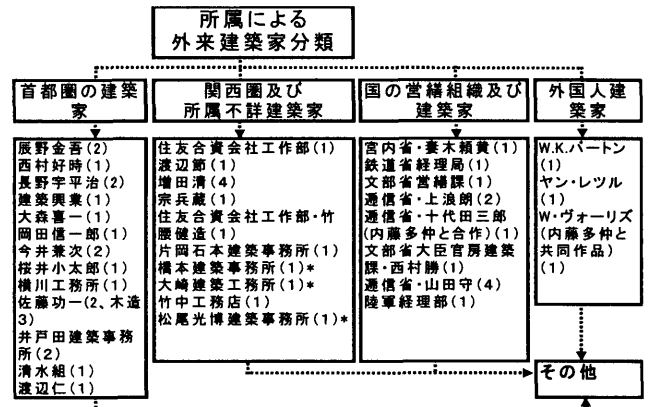


図1 戦前広島における外来建築家活動の類型

注：建築家及び建築家組織の名称は活動時期の順によって排列し、名称後（ ）の数字は作品数を示す。（*）は所属不詳の建築家又は事務所を示す。建築家の所属が広島の作品を手掛ける時の所属である。



図2 広島地方建築組織の活動類型

地元の建築家又は設計組織の活動について、今の段階で確認できるものをまとめると図2のようになる。このように、地元建築家の作品は見当たらない。広島の地方組織として広島県営繕課、広島市役所営繕課、広島県立職工学校の活動が見られるものの、その組織における具体的な建築技師らについては不明である。唯一市役所営繕技師小田能清の作品として確認できるのが1棟あるが、それも東京の今井兼次との協力作品であった。このように広島地元の建築家の作品は未だ確認することができず、地方の営繕組織の作品もかなり少なかったことがわかる。

以上のように、戦前広島における建築活動の主流を占めたのは外来建築家であり、特に、辰野金吾、長野宇平治、佐藤功一、山田守など、中央から広島に訪れて設計活動をした建築家の活動が注目される。なお、広島の民間建築家又は建築事務所の活動は、現段階では不明であり、地方営繕組織の作品も少なかったことが指摘できる。

4. 外来建築家の活動とその特徴

前章において、戦前広島の近代建築を語る上で外来建築家の活動は非常に重要であることが明らかになった。ここでは、広島の近代

建築における外来建築家の活動とその特徴について考察する。外来建築家の活動は大きく国の営繕組織の建築家と民間建築家の活動に大別することができる。

4-1. 国の営繕組織の建築家の活動

国の営繕組織として、戦前広島における建築活動に関わったのは鉄道省経理局、文部省営繕課、文部大臣官房建築課、通信省経理局営繕課などである。官庁省の建築家の活動の役割については日本近代建築史において多く特筆されている。ここで注目されるのは日本近代機能主義・合理主義建築をリードした通信省の建築家の活動である。旧広島通信診療所（昭和10年）、旧広島貯金支局（昭和12年）、旧電気試験所広島出張所（昭和12年）、旧広島電話局西分局（昭和12年）、何れも山田守（1894～1966）の設計であった。特に、通信省の建築家として通信省在任中数多くの局舎建築を設計した山田守であるが、通常の局舎建築とは趣を異にする初の病院建築を広島において実現したのである。拙稿²⁰⁾において明らかにしたように広島通信診療所は、その規模は小さいが山田守にとっては最初の病院建築設計として、その設計理念と手法は東京通信病院という日本近代合理主義代表作の設計に大きな影響を及ぼした建築であり、後の東京通信病院を初めとする数多くの大病院建築を設計する原点であった。このように山田守の初の合理主義建築は、一早くヨーロッパの機能主義・合理主義を広島に紹介した役割を果たしたのである。なお、旧広島通信局庁舎（昭和8年）と旧広島郵便局電話分室（昭和3年）は、通信省の建築家上浪朗の設計であった。大正15年着工、昭和3年竣工の広島郵政局電話分室は、日字型の平面構成になり、中庭を通して各室に入るなど、機能によって空間を配置する意匠を呈した。正面ファサードは、連続する垂直線線形の半柱や縦長窓によって垂直線を強調している。これらの設計手法は大正14年着工の横浜中央電話局長者町分局建築にも表れている。また当時山田守らの表現派風局舎には頂階の窓にアーチ模様を繰り返すなどのデザインが多かったが、上浪朗は広島郵政局電話分室において入口に放物線の曲線を持ったアーチ模様のデザインを施すなど独自のデザインを追求していた。このようなアーチ模様の入口の設計は、昭和3年竣工の熊本通信局庁舎や昭和4年竣工の芦屋郵便局電話事務室の入り口にも現れている。また芦屋郵便局電話事務室の1階の窓に連続アーチをデザインするなど、彼の折衷的な性格と個人の独自の手法になっている。それらと比べて、昭和8年3月竣工の広島通信局舎は装飾を一切付けず、外壁にはクリーム色のタイルを張り、大きい窓が整然と並ぶなどモダンな建築であった。このようなスタイルは当時通信省経理局営繕課の潮流であったが、それをリードして来た吉田鉄郎と山田守らの活動が、後輩である上浪朗らにも大きな影響を与えたと思われる。広島通信局の建築は後の山田守設計の広島通信診療所の建築（昭和10年）に比べてやや重厚な感じを与えているが、当時の広島においては極めてモダンな建築であった。

以上のように、日本の30年代合理主義建築をリードした通信省の建築家の活動は、地方都市の建築近代化においても先鋒的な役割を果たしたのである。

4-2. 民間建築家の活動

民間建築家の活動形態を見ると囑託による活動と建築主の依頼やコンペによる単発的な設計活動の二つに分けることができる。

広島県や市の囑託を受けながら活動を見せた建築家増田清²⁰⁾と佐

藤功一の活動については拙稿³⁰⁾において既に論じており、本稿では省く。そこで、本節では主に外来建築家の活動の特徴である単発的な設計活動について論じる。大正、昭和初期ともなると広島市の都心にもレンガ造、コンクリート造の大型の建築物が多数建てられるようになるが、金融関係の建築物はステータスを示す意図が強く、豪華な装飾をもつものが多い。またインテリアは大きな吹き抜けの営業ホールを持つのを恒とし、他の種類の建築物とは一線を画する形態を誇った。ここで、戦前広島の近代建築と建築家の活動を考察するには一連の銀行建築に注目し、その設計者と関連して考察することが有効であると考えられる。

1) 辰野金吾と日本銀行広島出張所、三十四銀行広島支店：日本銀行本店、東京駅などの名作品を残した日本を代表する建築家辰野金吾³¹⁾（1854～1919）の作品が広島に2つ建てられた。一つは明治38年に建てられた日本銀行広島出張所³²⁾（写真1）である。木造2階建ての規模で、その外観にはイオニア式の付け柱が壁面に林立し、半円形や三角形のペディメントが要所に用いられており、玄関上のドーム付近、窓、屋根窓の枠にバロック風の装飾が施されているなどの特徴を現している。もう一つは、明治40年に中島本町の東寄りの、伝統的な町家が並ぶ一角に建てられた三十四銀行広島支店である。間口が狭くて奥行が長い敷地一杯に、軒を接して建てられたこの建物は、木造でありながら、ファサードのみに、レンガと石を交互に積層するなどの装飾が施されている。このように辰野金吾は、広島では木造建築に「辰野式」と呼ばれる彼独特の装飾モチーフを示すにとどまった。なお、大正2年12月に建てられた広島商業銀行本店（写真2）は、交差点に面してアーチ状の玄関をとり、その上に小さなドームを乗せる構成となっており、両サイドのレンガの赤い壁面と白い御影石のデザインや屋根にドーマーヴインドーや換気丸窓がめめぎあっているなど、「辰野式」を思わせるが、その設計者は不詳である。

2) 第一銀行広島支店と西村好時：大正4年に広島に支店を開設した第一銀行は、5年後の大正9年5月に大手町筋と本通りが交差する角地に新築移転する。銀行建築の設計で名高い西村好時³³⁾（1886～1961）が清水組設計部に在籍中に手掛けたものである。一部鉄筋コンクリートを取り入れたレンガ造の2階建てで、玄関は大手町筋側と本通り側の2ヶ所に設けられ、内部の営業室は吹き抜けの大空間となっていた。レンガ造の2層に渡る柱と、上部のアーチや装飾が目される（写真3）。

3) 千代田生命広島支社と宗兵蔵：昭3年8月、金融機関が建ちならぶ大手町筋に千代田生命広島支部の新社屋が竣工した。帝国奈良博物館（現在の奈良国立博物館）を手掛けた大阪の宗兵蔵³⁴⁾（1864～1944）が設計。レンガ造3階建てのこの建物は、外壁の1階部分と上層部に白い御影石が張られ、その間がレンガ壁で、赤と白がコントラストをなす建物だった（写真4）。アーチ窓、バルコニー、軒にはルネッサンス風の表現、小アーチの連続する軒腹にはロマネスクの手法が取り入れられ、宗兵蔵の特徴を表す折衷様式で全体がまとめられていた。

4) 三井銀行広島支店、日本銀行広島支店と長野宇平治：三井銀行広島支店（写真5、昭和11年竣工、現存）は、長野宇平治³⁵⁾（1867～1937）が設計したのである³⁶⁾。この建物は鉄筋コンクリート2階建てで、敷地は南北方向に長く、現本通りに面している北側が正面

となり、玄関が設けられている。正面玄関の両わきには、正面2層分の丸い石柱が左右おのおの2本ずつ建てられていた。1階部には中央の扉をはさんで2本ずつ、計4本のドリス式の柱頭を持つ石柱、2階部には4本のコリント式の柱頭を持つ石柱が設けられている。東側の入口では、1階部にのみ扉の両側に1本ずつ、2本のドリス式柱頭を持つ石柱が設けられている。屋上のパラペット部は、いくつか正方形に切抜き、そこに模様の入った木製の枠が嵌め込まれている。矩形の窓が正面1階には8つ、2階には左右に3つずつ、中央にアールのついた大きい窓が3つ設けられ、バランスが良く整えられている。外観は、1階部分が横方向の目地の目立つ岡山産万成岩（花崗岩）、2階部分は凝石ブロックとなっている。さらに、底はないが1階2階わずかに張り出した胴蛇腹を用い、細かな蛇腹模様の装飾を施し、またパラペット部には、ブロッキング・コーニス（蛇腹押さえ）を用いて、階層毎にアクセントをつけ、水平線が強調されている。このような装飾が用いられている点と、柱などがギリシャの古典様式によって構成されている点は、西洋ルネッサンス期にみられる構成美を追求する建築様式と思われる。日本銀行広島支店（写真6、現存）は、明治38年、辰野金吾が設計した木造洋風建築の日本銀行広島出張所を、業務の拡大に伴い昭和11年9月新築移転したものである。その設計は日本銀行臨時建築部時代の長野宇平治だった。この建物は、鉄筋コンクリート石張りの3階建てで、昭和11年という時代背景もあってか、広島支店は東京日本橋の本店のような華やかな装飾はなく、渦巻き状の柱頭を乗せた4本の角柱はイオニア式を採用し、シンプルな外観となっている。内部の営業室には1、2階を貫く大きな吹き抜けの大空間が設計られ、吹き抜け空間には角柱が立つが、それにはより豪華なコリント式の柱頭飾りが施され、2階の応接室には大理石を使った豪華な装飾も見られた。

これらの長野宇平治の二つの作品は現存している。

5) 鴻池銀行広島支店と渡辺節：大阪が本店の鴻池銀行は、広島出店に伴って大正12年7月、本通りのほぼ中央部に支店を新築した。設計は日本勧業銀行本店など銀行建築を数多く手掛けていた渡辺節³⁹⁾（1884～1967）であった。この建物は、RC造の平屋・一部2階の小規模なものだが、ルネッサンス様式を基本とし、正面の3連の飾りアーチやコーナーストーン等が印象的な建物である（写真7）。

6) 芸備銀行本店と建築興業：『創業百年史』（広島銀行編1979年）によると、大正9年第六十六銀行や広島銀行など広島県内の有力7行が合併し、県下の最大手となる芸備銀行が発足した⁴⁰⁾。大正12年初頭、市内紙屋町約560坪の土地を購入し、直ちに設計を東京の建築興業に委託するが、関東大震災により設計図が焼失するという事故があったため、改めて13年末から設計が再開され14年夏に完成したという⁴⁰⁾。その際、設計の要点は、①一目にしてこれは何の建築であるかを誰もが知り得るように銀行らしい建物であること、②機械設備と各室配置の関係が合理的かつ機能的であること、③一定の予算内において最大の効果を挙げること、④構造に無理がなく耐震、耐火に万全を期すること、など4つの要素を完備することになったという⁴⁰⁾。このうち耐震性への意識は大正12年の関東大震災の影響が大きかったといえる。こうして芸備銀行（写真8）は建築興業の設計により、大正14年8月着工、昭和2年6月に竣工した。建物は鉄筋コンクリート5階建て、地下1階の大規模なもので、外観は近世復興式を採用し、正面の2階から4階にわたる大きなイオ

ニア式列柱、円形窓やポイント的な装飾が特徴的である。これらのデザインは、「印象に残る銀行建築らしい美観」という設計要点の具現と思われるが、「実用性」や「経済合理性」という側面は読み取り難い。

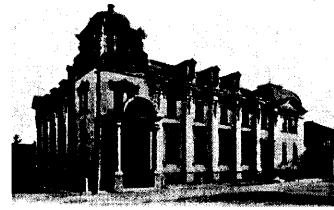


写真1 日本銀行広島出張所

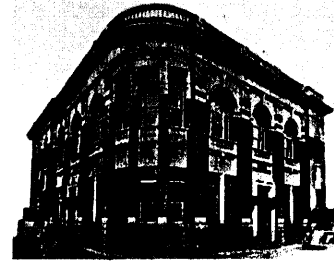


写真3 第一銀行広島支店

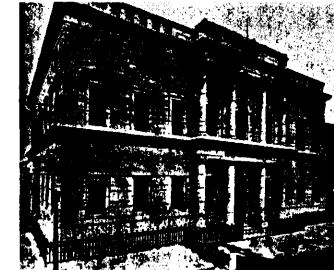


写真5 三井銀行広島支店

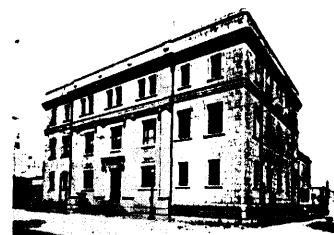


写真6 日本銀行広島支店

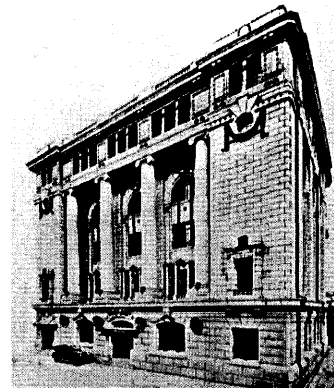


写真8 芸備銀行本店



写真12 広島貯金支局



写真2 広島商業銀行本店

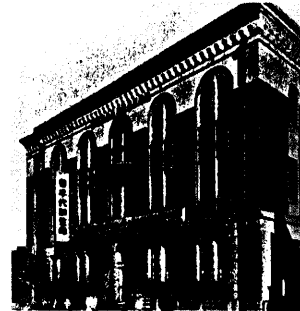


写真4 千代田生命広島支店

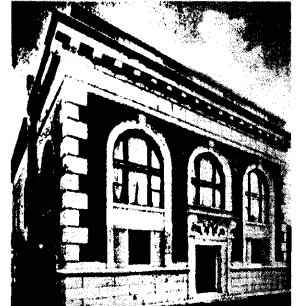


写真7 鴻池銀行広島支店



写真9 住友銀行広島支店



写真10 広島銀行集会所

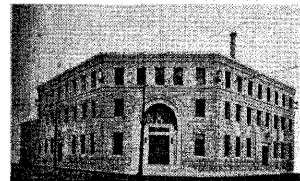


写真11 広島県農工銀行本店

7) 住友銀行広島支店と竹腰健造: 住友銀行広島支店(写真9)は、昭和3年12月紙屋町の交差点にほど近い電車通りに新築移転した。鉄筋コンクリート4階建て、地下1階。昭和2年に竣工した芸備銀行本店の南隣に位置し、幅と高さともほぼ同規模で建てられた。しかし、形態や様式では芸備銀行本店と異なり、対照的であった。設計は住友合資会社工作部の竹腰健造⁴⁾であった。外観は平坦で閉鎖的な壁面で囲まれ、正面中央部には線型大アーチを設けている。装飾は主にアーチの縁部と軒蛇腹部に施し、全体的にはロマネスク様式で統一されている。内部は口の字型の平面で構成され、中央にはトップライトのある3層に渡る吹き抜けの大空間が筒状に位置し、営業室として利用された。銀行建築としては珍しく正面に吹き抜けの営業室を採らない幾何学的な集中式空間となっていた。

8) 広島県農工銀行本店と増田清: 設計者は広島市役所の設計で広島との関わりの深かった増田清で、建物は昭和6年4月に竣工した。出入り口を交差点の角に向けてとる銀行建築の一典型のプランで、外観は正面中央にアーチ状の入口を設け、1、2階部分は横目地による積層的な構成とし、3階部分には間壁にレリーフ装飾が付けられていた。部分的な装飾は見られるものの全体的にはシンプルなデザインだった。増田は建築雑誌に「米国の銀行建築」という題でアメリカの銀行建築の専門家の意見を紹介しており、その際にこの銀行の平面図を掲載している。この建物で増田はアメリカ式の合理的銀行建築のあり方の具現を試みたのかも知れない(写真11)。

以上のように、大正、昭和初期ともなると広島の都心にもレンガ造、コンクリート造の大型の金融関係の建物が建てられ始めた。金融関係の建物の特徴は、ステータスを示す意図が強く、豪華な装飾を持つものが多く、大きな吹き抜けの営業ホールを持つのを常とした。それは建築興業の設計によって紙屋町に昭和2年に建った芸備銀行本店に頂点を見せた。ヨーロッパの伝統的な古典主義的構成を正確に示すものだが、都市空間を層によって秩序づけて表現するという日本人にはなじみの無かった立体構成の形式が、ここに広島において大規模な形で提示されたのである。同様の古典主義的な構成は、水平性を強調した軒のラインに沿わせて円柱を連続させた三井銀行広島支店(大正14年)にも見られる。日本銀行時代の辰野金吾の弟子に当たる長野宇平治が設計した三井銀行は、簡素ながらもオーダー装飾、アーチを挟んで矩形の窓が並ぶ3連窓の形式など、水準の高い建築美学を示している。昭和3年には芸備銀行に並んで住友銀行広島支店が登場する。住友合資会社工作部の竹腰健造が設計した住友銀行は芸備銀行とほぼ同規模のファサードを有するが、ここではマッシュな石張りの壁面の中央部に巨大なロマネスク風半円アーチが設けられ、またアーチの縁や軒飾りには細かいアーチ形が連続するロマネスク様式特有のモチーフが施され、単純で重厚な建築の形式が示された。ルネッサンス様式のアーチは明治維新以来、洋風建築の代名詞ようになっていたが、広島の本通りの中央部に現れた渡辺節設計の鴻池銀行広島支店(大正12年)は半円アーチを主モチーフとした建築作品である。タイル張りの壁面とコントラストさせた石のアーチは、中央上部にV字形の要石を挟み、アーチ間には円形のメダル装飾を配し、建物の角は隅石飾りをつけ、軒蛇腹には歯形装飾を並べるなど、そこにはコンパクトにルネッサンス様式装飾が集約されていた。

1930年代には徐々にそのデザインも変化して、建物は重厚さから

華やかさへと方向転換する。昭和6年には増田清が設計した広島県農工銀行本店が建てられる。外観の正面中央にアーチ状の入口を設け、1、2階部分は横目地による積層的な構成とし、3階部分には間壁にレリーフ装飾が付けられているなど、部分的な装飾は見られるものの全体的にはシンプルでモダンなデザインだった。それに比べて昭和10年に建てられた広島銀行集会所(写真10)の外観は全体的にはシンプルながらルネッサンス風で構成されている。その設計は竹中工務店であったが、建物の中央に3層にわたる吹抜けの上部にトップライトを設けるなどユニックなデザインであった。昭和11年には長野宇平治が設計した日本銀行広島支店が建てられる。日本銀行には華麗な装飾はなく、シンプルな外観となっているが、全国の日本銀行支店と同じく古典主義の様式が採用されている。そして登場するのが、通信省風の国際派スタイルで建てられた広島貯金支局(昭和12年、写真12)である。柱の間に目一杯の窓を設けたこの建物は、日本近代機能主義・合理主義建築をリードした通信省の建築家山田守の設計であった。山田守は広島通信診療所(昭和10年)の設計に続いて銀行建築においても国際派スタイルを広島に紹介したのである。

以上のように、金融関係建築のデザインはやや様式主義的であったが、ヨーロッパの近代建築運動の影響を受けつつ、全般的な流れとしては近代主義的方向へと導かれたのである。

以上により銀行建築のデザインをまとめると表6のようになる。

表6 銀行建築のデザイン分析

| 建物名称 | 竣工年 | 設計者 | 構造/階数 | 柱式 | 道社の関係/スタイル特徴 |
|-----------|-------|-------|-------------|------------|--|
| 日本銀行広島出張所 | 明治38年 | 辰野金吾 | 木造/2階 | イオニア式 | 角地(交差点)/バロック風の装飾 |
| 第一銀行広島支店 | 大正9年 | 西井清時 | レンガ造/3階 | 無 | 角地(交差点)/レンガの壁柱と軒部のアーチや装飾 |
| 鴻池銀行広島支店 | 大正12年 | 渡辺節 | RC造/平屋・一部2階 | 無 | 街並み/3連のアーチ、ルネッサンス様式 |
| 三井銀行広島支店 | 大正14年 | 長野宇平治 | RC造/2階 | ドーリアとコリント式 | 街並み/ルネッサンス様式、上下異なる柱頭 |
| 芸備銀行本店 | 昭和2年 | 建築興業 | RC造/5階・地下1階 | イオニア式 | 街並み/イオニア式列柱と円形窓、近世復興式 |
| 住友銀行広島支店 | 昭和3年 | 竹腰健造 | RC造/4階・地下1階 | 無 | 街並み/大アーチ、平坦な壁、全体的にロマネスク様式 |
| 千代田生命広島支店 | 昭和3年 | 宗兵衛 | RC造/3階・地下1階 | 無 | 街並み/アーチ窓、バルコニー、軒はルネッサンス風、小アーチの連続する軒飾りはロマネスク風 |
| 広島県農工銀行本店 | 昭和6年 | 増田清 | RC造/3階・地下1階 | 無 | 角地(交差点)/シンプルでモダンなデザイン |
| 広島銀行集会所 | 昭和10年 | 竹中工務店 | RC造/3階 | 無 | 街並み/3層にわたる吹抜け+トップライト、外観はルネッサンス風 |
| 日本銀行広島支店 | 昭和11年 | 長野宇平治 | RC造/3階・地下1階 | イオニア式 | 街並み/古典様式の要石が特徴 |
| 広島貯金支局 | 昭和12年 | 山田守 | RC造/4階・地下1階 | 無 | 角地(交差点)/国際派スタイルで、柱の間に一杯の窓 |

5. 結び

以上により、戦前広島における建築家活動の形態とその特徴について考察を試みた。

その結果: 1) 広島における近代建築は、明治初期の軍用建物がレンガ造で建てられたのに引き続き、金融関係建物や産業建物においてレンガ造が建設され、さらに大正期になると民間・公共建物において鉄筋コンクリート造が続々と建てられたのである。2) これらの近代建築の設計活動の主流を占めたのは中央から広島市へ訪れた外来建築家であった。なお広島の民間建築家の活動は現段階では不明であり、地方官籍組織の作品も非常に少なかったのである。これまで、地方都市札幌や岡山などにおいては、地元有力な官籍組織や建築家が在籍し、旺盛な設計活動を行ったことが明らかになっている⁴⁾。これらに比べて、広島は中国地方の中核都市でありながら、

地元建築家や営繕組織の活動は殆ど目立たなかったのである。これらは広島における建築家活動の一つの実像であり、そのような状況を生み出した要因の一つとして、軍都という都市の性格が指摘できるだろう。3) 外来建築家の活動の特徴として、国の営繕組織の建築家と民間建築家の活動の2つに大別することができる。4) 国の営繕組織の建築家の活動として通信省の山田守や上浪朗の活動が比較的明らかにされており、彼らは一早くヨーロッパの機能主義・合理主義を広島に紹介する役割を果たしたのである。このように通信省の建築家達は中央だけでなく、地方においても近代建築の合理化をリードする立場であった。5) 民間建築家の活動として、嘱託による活動と建築主の依頼などによる単発的な設計活動が見られるが、まず嘱託制度による佐藤功一や増田清の活動については拙稿において既に論じている。ここで注目されるのは、明治末期から大正を経て昭和初期にかけて広島において多くの銀行建築が建てられ、その設計には、日本を代表する建築家辰野金吾、西村好時、長野宇平治、渡辺節、竹腰健造、山田守なども関わり、様々なデザインが展開されたことである。近代広島の金融建築は、規模の差はあれ、ほぼ同一機能を有すると思われる建物が異なる建築家によって、それぞれのデザインを展開しつつ、約40年に渡って設計されてきたのである。銀行建築においては、機能的には大差はなく建物のプランニングや高さ、さらに構造形式も一定の範囲の中でのパリエーションであった。従ってほとんど同じ構造体に、様々なデザインの外観が適用されたことになる。建築家たちにとってのデザイン上の課題は主として銀行建築のもつ象徴性とその表現にあったと考えられる。その表現の手段として設計者は歴史主義から近代主義まで様々なデザインを、いわば様式として選択的に用いて来ており、その意味では様式主義的設計手法といえよう。しかし金融建築においても、ヨーロッパの近代建築運動の影響を受けつつ、全般的な流れとしては近代主義的方向へと導かれたことが指摘できる。

謝辞 本研究は、2005年度広島国際大学特別研究助成を受けた。記して謝意を表する。

写真の典拠 写真1は広島市公文書館所蔵。写真2、写真8は広島県立文書館所蔵。写真3は広島市公文書館所蔵。写真4は千代田生命蔵。写真5は『建築世界』(大正14年7月号)所収。写真6は清水建設広島支店所蔵。写真7は『渡辺節作品集』所収。写真9は広島市公文書館所蔵。写真10は広島公文書館所蔵。写真11は中国郵政局所蔵。

注

- 1) 『広島に対する原子爆弾の効果第1巻物的損害調査部』(広島文化センター、昭和57年刊行)。合衆国戦略爆撃調査団は、報告書(The United States Strategic Bombing Survey "The Effects of the Atomic Bomb on Hiroshima, Japan")のはしがきによれば、「ローズベルト大統領の命令によって、1944年11月3日に陸軍長官によって創設された」とあり、当初は「ドイツに対する空襲の効果を確認かつ専門的に調査すること」を目的として創設したのである。日本に対しては、「対日戦における空中攻撃のあらゆる型の効果」を明らかにすべしというトルーマン大統領の命令によって、終戦直後から大々的に進められ、本調査団員は民間人300、将校350、軍属500という規模であった。この調査団は、日本国内の戦災都市を調査したが、特に広島については1945年10月14日から11月26日にかけて詳細な調査を実施した。その結果は、1947年5月に報告書としてまとめられており、本稿では被爆当時存在した建物を確認するために、そのうちの物的調査部の文献を参照する。
- 2) 『被爆50周年未来への記録—ヒロシマの被爆建物は語る』(被爆建造物調査研究会編、広島平和記念資料館発行1996年)や『広島の被爆建造物/被爆45周年調査報告書』(被爆建造物研究会編、朝日新聞広島支店発行、1990年12月1日)など。
- 3) 佐藤重夫「広島原爆ドームとヤン・レルツ」日本建築学会大会学術講演要録(中国)昭和43年10月、P819-820。石英三郎「原爆ドームとヤン・レルツ」『建築雑誌』昭和43年10号、P14-15。藤田文子「原爆ドームの設計者ヤン・レルツ」、『新建築』、昭和44年2月号P237、同3月号P253。
- 4) 拙稿として『建築家増田清の経歴と広島における建築活動について』日本建築学会計画系論文集第525号P327-334。『広島通信診療所の建築について』日本建築学会計画系論文集第540号P307-314。『赤十字社広島病院と広島における建築家佐藤功一の活動に関する考察』日本建築学会計画系論文集、第551号P335-341。などがある。
- 5) 研究方法としては、一定の公開された文献に建物名や建築家名(建築組織を含む)が掲載された場合を基本とし、広島に関する歴史文献や広島の建築に触れた本、雑誌、新聞記事などにより、必要な情報を整理することになる。本研究で指す近代建築は、いくつかの木造建築を除いて非木造建築に限定している。被爆建造物を除外したのは、被爆で残存したものはいくつか、現時点では木造も含めて全て把握するのは困難だからであり、将来条件を限定して把握

- するという課題としておきたい。なお、建物名は建設時の名称に統一させる。
- 6) 李明、その他「歴史的建物の建築寿命とその存続形態に関する考察/広島における被爆建造物の実態とその動向に着目して」(日本建築学会計画系論文集第584号P108)の【表1】において調査対象であった建物のリストをまとめているので、それを参照すること。
- 7) 例えは広島地銀広島支店を子供百貨店とし、小田政倉庫を太陽劇場と間違えているなど。
- 8) 例えは陸軍糧秣支廠、広島気象台、頼山陽文徳殿、陸軍兵器補給廠などが脱落している。
- 9) 『広島県の歴史』(後藤陽一著、山川出版社昭和47年2月10日)206頁による。
- 10) 『広島に於ける仮議事堂に於いて』(『建築雑誌』明治28年11月)による。
- 11) 『官報』(第三千七百七十二号 明治28年11月11日)による。
- 12) 『ひろしま歴史の焦点 下』(中国新聞社1976年12月1日)58頁による。
- 13) 『水道の通水を祝賀して』(『目で見る広島市の100年』郷土出版社1997年7月所蔵)には明治31年8月25日付(広島市水道局提供)の完成祝賀時の写真が掲載されている。
- 14) 写真は広島市公文書館所蔵。『被爆50周年未来への記録—ヒロシマの被爆建物は語る』(被爆建造物調査研究会編、広島平和記念資料館発行1996年)198頁に掲載されている。
- 15) 軍事施設の整備は大正期、世界的な軍縮の流れの中で、一時停滞するが、昭和初期には軍事体制強化の中で拡充の時代を迎える。
- 16) 『被爆50周年未来への記録—ヒロシマの被爆建物は語る』(被爆建造物調査研究会編、広島平和記念資料館発行1996年)122頁による。
- 17) 『新修広島市史』(第4巻・文化風俗史編、第6、7巻・資料編広島市役所1958、59、60年)、『写真で見る、広島あゝのころ』(中国新聞社、昭和52年8月)、『図説広島市史』(広島市公文書館1989年)、『広島新史 歴史編』(広島市、昭和59)、『ひろしま歴史の焦点下』(中国新聞社1976年12月)、『広島県史蹟名勝真蹟』(昭和9年発行)、『目で見る広島市の100年』(郷土出版社1997年7月)、合衆国戦略爆撃調査団による「広島に対する原子爆弾の効果」、『被爆50周年未来への記録—ヒロシマの被爆建物は語る』(被爆建造物調査研究会編、広島平和記念資料館発行1996年)などを参考にした。
- 18) 前掲注17の資料に『日本の建築明治大正昭和1〜10巻』(村松貞次郎企画・編集、三省堂1979年〜1981年)、『渡辺節作品集』(波紋社、昭和7年)、『建築雑誌』(明治28年11月号)、『建築世界』(大正3年7月号、大正14年7月号、昭和11年2月号)、『国際建築』(昭和11年2月号)、『日本建築士』(昭和4年7月号)、『建築と社会』(昭和5年11月号)等を加えて参考にした。
- 19) 『広島県の歴史』(後藤陽一著、山川出版社昭和47年2月10日)185〜188頁による。
- 20) 昭和4年3月20日から5月13日までの55日間、広島市では昭和産業博覧会が開催される。『写真で見る、広島あゝのころ』(中国新聞社、昭和52年8月)90〜91頁には博覧会第1会場やモンゴルの風景が載っている。なお、86頁〜89頁には帝人広島工場、錦華人絹、東洋工業、缶詰工場、広島三菱造船所などが掲載されている。
- 21) 前掲注17の資料に、『日本の建築明治大正昭和1〜10巻』(村松貞次郎企画・編集、三省堂1979年〜1981年)、『通信省の建築』(常盤書房1933年)、『山田守建築作品集』(東海大学、昭和42年)、『福屋五十年史』(福屋社史編集委員会編 1980年4月)、『広島富國館新築落成記念』(合資会社清水組、昭和11年8月22日)等を加えて参考にした。
- 22) 『目で見る広島市の100年』(郷土出版社1997年7月)23頁に広島瓦斯広島工場、33頁には帝人絹織広島工場と広島電気軌道火力発電所の写真と説明文が掲載されている。
- 23) 『広島市の文化財第43集広島市近世近代建築物調査報告』(広島市教育委員会1989年)58頁を参照。
- 24) 『福屋五十年史』(福屋社史編集委員会編 1980年4月)による。
- 25) 『広島富國館新築落成記念』(合資会社清水組、昭和11年8月22日)には、広島富國館工事概要が詳しく掲載されている。
- 26) 桜井小太郎(1870〜1953)は、イギリスで建築を学んだ後、明治29年10月16日海軍技師として呉に赴任。明治36年12月臨時海軍建築部の建築課長、明治41年10月には横濱實業建築課長に転勤し、大正2年三菱合資会社の技師長として三菱丸の内ビジネス街の建設の主軸を担った建築家である。大正12年に三菱地所を退社した後、桜井小太郎建築事務所を開設する。ここで明治生命広島支店(昭和4年4月)は桜井小太郎建築事務所時代の作品になる。
- 27) 十代田三郎(1894〜1966)は、大正8年早稲田大学を卒業後通信省に入省、昭和15年退官し、早稲田大学で教鞭をとったとされ、長野県下にその作品が多いとされている。
- 28) 『広島通信診療所の建築について』日本建築学会計画系論文集第540号P307。
- 29) 増田清(明治21年〜昭和52年)は、大正2年7月に東京帝国大学工学部建築学科を卒業し、主に大阪を拠点として建築活動を行い、鉄筋コンクリート構造などの学術分野において幅広くその才能を発揮した人物である。
- 30) 増田清については、拙稿「建築家増田清の経歴と広島における建築活動について」(日本建築学会計画系論文集第525号P327-334)を参照すること。次に、佐藤功一については拙稿「赤十字社広島病院と広島における建築家佐藤功一の活動に関する考察」(日本建築学会計画系論文集、第551号P335-341)を参照すること。
- 31) 辰野金吾の人物像については、藤森照信「かたじけなくの精華/辰野式」(『日本の建築明治大正昭和3』/『国家のデザイン』三省堂昭和54年2月20日)を参照すること。
- 32) 日本銀行広島出張所と三十四銀行広島支店の作品は、「国家のデザイン」(『日本の建築明治大正昭和』三省堂)所収171ページ辰野金吾年譜の作品リストに載っている。
- 33) 西村好時の業績については伊藤三千雄+前野純「様式美の挽歌」(『日本の建築明治大正昭和8』三省堂昭和57年8月10日)を参照すること。
- 34) 宗兵衛の業績については、坂本勝比古「商都のデザイン」(『日本の建築明治大正昭和5』三省堂昭和55年9月10日)を参照すること。
- 35) 長野宇平治の人物像については、藤森照信「国家のデザイン」(『日本の建築明治大正昭和3』三省堂昭和54年2月20日)を参照すること。
- 36) 『建築世界』大正14年7月号口絵に「三井銀行広島支店新築設計図」が掲載され、設計は「工学博士長野宇平治事務所」となっている。
- 37) 渡辺節の業績については、山口廣「都市の精華/関西の建築界」(『日本の建築明治大正昭和6』三省堂昭和54年9月1日)を参照すること。
- 38) 『創業百年史』(広島銀行編1979年)211頁「芸術銀行設立の経緯」による。
- 39) 『創業百年史』(広島銀行編1979年)276頁「本店新築」による。
- 40) 『創業百年史』(広島銀行編1979年)276頁「本店新築」による。
- 41) 竹腰健造の業績については、坂本勝比古「商都のデザイン」(『日本の建築明治大正昭和5』三省堂昭和55年9月10日)を参照すること。
- 42) 池上重康、越野 武、角 幸博「北海道帝国大学の営繕組織の沿革と建築技術者について」(日本建築学会計画系論文集第541号)角 幸博「田上義也の初期作品について」(日本建築学会大会学術要録集、1985)、前同「建築家マックス・ヒンデルの経歴と作品について」(日本建築学会計画系論文集第465号P175〜181)、上田恭嗣「建築家葉師主計の経歴と建築活動について」(日本建築学会計画系論文集第509号P209〜215)などによる。

(2006年2月6日原稿受理、2006年7月6日採用決定)